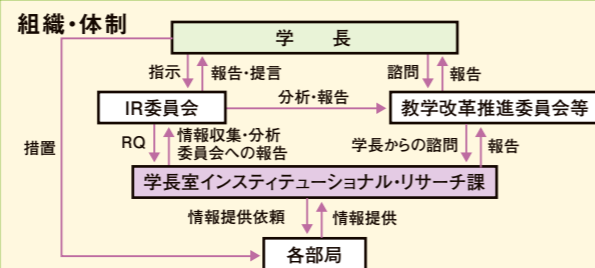


狙い	▶継続的な改善のための意思決定支援 ▶マネジメントサイクルの循環
組織・構成員	学長室インスティテュショナル・リサーチ課 (兼任も含めて職員3人)
主な業務	▶学内外の情報の収集と分析 ▶教学・研究・経営に関する 意思決定支援のための政策提言
データの収集法	▶各部門担当者から収集 ▶学生調査等を実施して収集
データの公開法	▶IR委員会、教学改革推進委員会に提出 ▶公開可能なデータはウェブに掲載
活用例	▶学生調査の結果から教学改善 ▶中長期計画のKPI設定を支援

東北学院大学

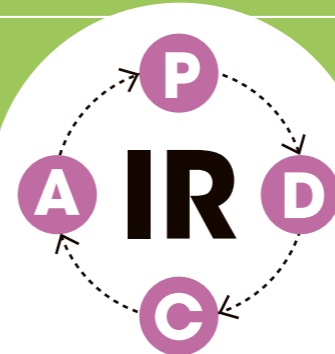
学生数 / 11239人
教員数 / 312人 職員数 / 168人
学部 / 文学部、経済学部、経営学部、法学部、工学部、教養学部
キャンパス / 土樋キャンパス、泉キャンパス、多賀城キャンパス
※2018年5月1日現在



IRでまわす! PDCAサイクル

第4回

東北学院大学



現在の問題を分析するだけでなく
将来の課題をも洗い出し経営改革へ



学長室
インスティテュショナル・リサーチ(IR)課係長

齋藤 渉

さいとうわたる ●2001年東北学院大学法学部法律学科卒業。2001年学校法人東北学院入職、法人事務局財務部を経て2017年より学長室勤務。2019年東北学院大学院経済学研究科博士前期課程修了。修士(経営学)。同博士後期課程在学中。東北大学履修証明プログラム2017-18「アカデミックリーダー養成プログラム(LAD)」修了。

教育・研究・経営を 一体的に捉えるIR

貴学のIR組織の成り立ち
について教えてください。

本学では、「学長室インスティテュショナル・リサーチ(IR)課」がIRを担当しています。2016年7月に設置され、職員は兼任も含めて3人です。活動スタート時にまず行ったのは、本学におけるIRの規定と制度の構築です。というのも、他大学のIR担当者から、「データの

提供を渋る部署がある」「分析はしたが、具体的な改善につながっていない」といった問題があることを聞いて、活動の目的や内容が誰が見てもわかるように可視化しておく必要があると感じていました。規定には、IRの定義や業務内容、活動を推進する委員会の設置などを記載しています。規定づくりを最初に行ったことで、IRの活動をスムーズにスタートさせることができました。

独立のかつ公平な立場で、「教育・研究・経営を一体的に捉える」ためです。大学運営では、学生の成長と質保証を軸に、教育・研究の効果を高めつつ、経営基盤の安定を図ることが求められます。当然、その意思決定支援を行うIRには、特定の部局の見方に偏ることなく、全学的な視点で課題を捉えることが必要とされます。そのため、学長室に設置しました。

データ分析では 解決策のヒントを探る

これまでの具体的な活動とその成果は?

教学においては学修行動と学生生活に関する実態調査を実施しました。データを分析する際には、分析結果の数値だけでなく、「数値の裏にあるもの」を探るようになっています。例えば、学生の授業外学修時間が少ないことについて、その事実と言及するだけでなく問題点の指摘で終わってしまわず。そこで、自由記述のテキスト分析を行い、その要因を探るようになっています。分析の結果、学生は「学修成果」「予習・復習」「課題」を互いに密接に関係しているものとして、意識していない傾向にあ

ることなどが判明しました。この気づきを基に、シラバスに授業内容だけでなく、予習・復習などの授業外学修についても具体的に記載することなどを提案しました。数値の裏を探れば、解決策のヒントは見つかります。

2018年度は第1期の3年目にあたり、中間検証中ですが、現状のプランには抽象的・総花的な表現が見られます。そこで、第2期プランでは教育・研究・経営・社会貢献など5つの領域で、定量的に測定可能なKPIの設定に取り組んでいます。

のピアレビューを行う予定ですが、将来的には共通の指標や測定方法の開発などでも協力していければと考えています。

この他にも、卒業後3年となる卒業生を対象としたアンケートを実施しています。「本学での学びに対する満足度」は、「大変満足」または「満足」との回答が90%以上を占めます。しかし、その結果でよしとはしていません。残り10%の人が、なぜ満足できなかったのかを分析しています。

今、大学に強く求められている内部質保証についてのIRの取り組みは?

学位授与の方針の測定・評価です。そのため、学修成果を測る外部アセスメントを2019年度から導入する予定です。この結果を基に教育の改善に取り組むだけでなく、学生にもフィードバックすることで、「自分は東北学院での学生生活を通じて、どのような成長を遂げたのか」を明確に理解してもらいたいとの考えがあります。

今後に向けた課題は?

IRのしくみはつくりましたが、人が入れ替わっても、それが機能し続けるかが課題です。学生の成長のために、今取り組んでいることが組織風土として定着するよう、全教職員がデータを基に議論する文化を大切に育てていきたいと思っています。

そして、本学に来てよかつた人全ての人に思ってもらえるような大学にするという究極の目標の達成に、IRを通して寄与したいと考えています。

東北エリアは今後、最も人口減少が進んでいきます。そうした環境変化の中でも、「本学で学びたい」と高校生から選ばれる大学であり続けるためには、現状に満足してはいけなからず。ネタティブな回答の中には、将来的に課題となりそうな問題の芽が隠れています。しかし、それは同時に本学をさらに発展させる方策のヒントでもあるのです。現状の分析を行うだけでなく、本学の発展につながるような将来の課題の洗い出しにも取り組んでいます。

学修成果の可視化に関しては、ベンチマークとして他大学との比較も必要でしょう。本学は、規模やエリア内でのポジジョンが似ている、九州の西南学院大学と相互評価に関する協定を結びました。当面は自己点検評価

注目のKPI

東北学院大学に対する 卒業生満足度 100%

現在、卒業生の約90%が大学での学びに満足しているが、それに甘んじず、今後も東北エリアでのポジションを高めるため、これを100%にするべく取り組むという。同大学は「THE世界大学ランキング日本版100位以内」という目標も掲げている。学生満足度を上げることで、ランクアップにつなげたい考えだ。